

図書館委員の先生方によるリレー連載のおすすめ資料紹介です。今年度から第2シーズンになりました。

Rhythm is it! =
ベルリン・フィルと
子どもたち

井上恵理

これは2004年、ベルリン国際映画祭で多くの人々を感動させたドキュメンタリー映画である。ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の常任指揮者サー・サイモン・ラトルの呼びかけで展開された6週間のダンスプロジェクトの記録である。年齢も文化的背景も異なるベルリン在住の子どもたち250人。クラシック音楽も知らず、踊ることも知らない。そして、将来への不安、社会への不信感もさえ抱いている若者たち。その子供たちが、6週間の間に見せる変化を映像は追っている。その変化を生み出したのがイギリス出身の2人の舞踊家と指揮者ラトルの人間と芸術に対する深い情熱、そして音楽の力だ。音楽はストラヴィンスキーの「春の祭典」。この作品は様々な振り付け家やダンスカンパニーが素晴らしい舞台にしているが、プロではない子どもたちの姿はそれ以上に何かを伝える。音楽が子どもたちの身体の中に吸収され、自身をみつめる成長のための栄養として消化していったと私は感じた。

ベルリン・フィルを振るラトルの姿、目の輝きに魅了される。すばらしい芸術家、そして人間だ。彼は語る。「芸術はぜいたく品ではなく必需品だ。水や空気と同じように生きるために必要なものだ。」そのことばに、私は深く共感する。



請求番号●VE2067～2068
『Rhythm is it! =ベルリン・フィルと子どもたち』
Imagica, REDV-00261

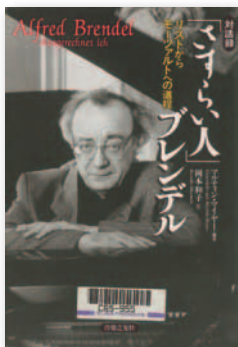
●いのうえり 本学准教授(リトミック)

対話録「さすらい人」
ブレンデル

江澤 聖子

私にとってベートーヴェンは、彼の温かく力強い音楽によって沢山の慰めと勇気を与えてくれる心の友として、また数々の困難と不幸に見舞われながらも芸術家としての使命感を持ち、誇り高く誠実に生き抜いた一人の人間として最も敬愛している作曲家である。そしてそのベートーヴェン解釈者、演奏家として私が最も共感し、信頼しているピアニスト

はアルフレード・ブレンデルである。とりわけモーツァルト、ハイドン、ベートーヴェン、シューベルト、リストの音楽に深い造詣を持ち、明快で隙のない構成感の中に豊かな抒情性と繊細さを併せ持つ彼の音楽は、楽譜を深く緻密に読み込む探究心と幅広い知識、また様々な音色、強弱法、速度法を絶妙に使い分ける高い技術力と感性によって丹念に磨かれ練り上げられたものである。私も10代の頃から彼の録音を聴き続けているが、そこからどれだけ多くを学んだことか。この対話録には、彼が若い頃どのようにピアノと共に過ごしてきたか、芸術論、一音楽家としての姿勢などが生き生きと書かれている。「ピアノを弾く哲学者」というイメージを持たれていることについて彼は次のように答えている。「すべては感情から発せられ、人を介した感情として戻ってこなくてはならない。感情の質を観察し、理性という感情のフィルターを使って高貴で重要なものとそうでない偽りのものを区別するのである」。彼の深い知性と情感のバランスの素晴らしさは、私の永遠の憧れであり目標でもある。



請求記号●C65-955
『「さすらい人」ブレンデル』
ブレンデル[述] 岡本和子訳
(音楽之友社)

●えざわせいこ 本学准教授(ピアノ)

この本と共に、2008年に行った77歳での引退公演のライブ録音「THE FAREWELL CONCERTS」請求記号●XD63985～6のCDも是非お勧めしたい。60年間の演奏活動の締め括りにふさわしい、最高の極みに達した名演である。